

## 寫生地案内

### 三 脚 子

海か山か、誰れしも夏になると迷ふ問題である。海邊は朝夕でなければ寫生が出来ぬ、炎天の砂濱と來たら到底十分間も居られたものではない。山間は樹の下へ入りさへすれば晝間でも寫生が出来る、その代り寫すべき緑は單調で、その上虫が居て寫生に伴ふ困難がある。所謂紳士連の入り込む温泉場や海水浴場は、寫生家、特に學生の領分外だ、あまり人の往かぬそして景色のよい處といふと、交通の不便に加へて、旅舎に氣の利いたものが無い。山間なら小さな川魚、海岸でも麥飯に満足せねばなるまい、蚤や蚊に苦しむのは言はずもがなである。

山へ往く人、海へゆく人、それは銘々の好みとして、さてあまり都會に遠くない處で、山ならば何處がよいかと言ふなら、僕は武州御嶽をお勧めする。御嶽へゆくには、甲武線を立川から青梅鐵道に乗かへて、終點の日向和田で下りる、それから、山道なり本街道なりを歩行するので、此間は二里半位ひなものである。山道といふのは、日向和田の萬年屋といふ茶屋の傍を谷へ下つて、多摩川を舟で渡り、吉野村から山へ入つてゆくの、眺望はよいが、樹が少ないから日中は暑からう、道は迷ふやうな事はない。本街道は、多摩川を左に見て二股尾を過ぎ、澤井から萬年橋を渡つて山に入るので、この方が少し遠い。山上は夏でも寒い位だから、其つもりで下着位ひは持つてゆかなけ

ればならぬ。宿屋は無いが、御師といふて神官の家が澤山ある、何れも壯大な構ひをしてゐるが、何處でも喜んで泊めてくれる、宿錢も極々手輕で済む。近來は知らないが、美術學校の岩村先生はよく夏中勉強に往かれたものだ。景色としては武藏野を見下した大景もあり、甲信の山々や富士を見る場處もあり、農家もある。道路山水も面白く、アマチュアにも専門家にも向く、一ヶ月位居てもスケッチには困るまい。次に海の方では、相模の秋谷邊が變化に富むてゐて面白からう、秋谷は、逗子で汽車を下りると馬車がある、それで葉山迄往つて、それから先は徒歩である、長者ヶ崎から一里程で、宿は一二軒しきやない。こゝは海の方もよいが、漁村の工合が變化に富むてゐて、いくらでも繪の出来る處だ。此邊は要塞地帯であるから、往くのなら其前に、東京灣要塞司令部の許可を受けなければいけぬ、最初に願書の雛形を請求し、後ち其雛形によつて願書を出すと、やがて許可狀が来る、前の時も後の時も、返信用として郵券を封入しないとイケない。秋谷邊から長井あたりは、人氣もよく宿料も高くはない、そして都人士はあまり來てゐない。

◎トマト味の味は、生食の美にあり。此の味、舊日本に未だ之あらず。淡泊なれども墨畫にはあらずして、水彩畫の味也。(黒頭巾氏『水菓子』の一節)

\* \* \* \* \*